BURST CITY
1994.9.30 No.14
300円
A.R.P
For Revolutionary Resistance

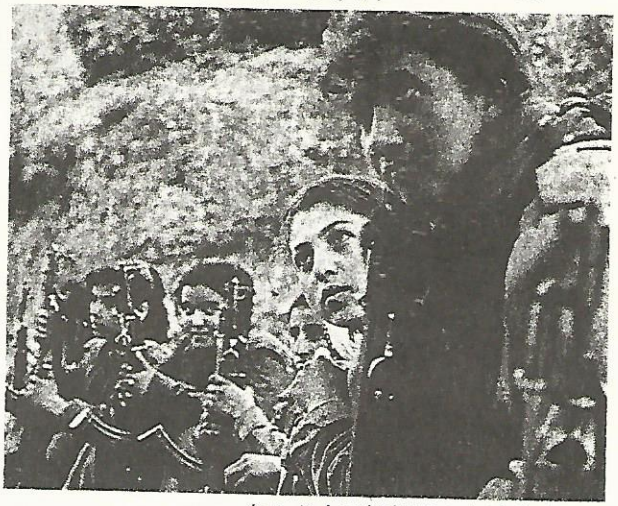
ARP
P.O.Box57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN
FAX +81/75-781-1253

闘いの中の闘い

革命運動の中で武装し戦う女性たち

サパティスタ民族解放軍の女性兵士たち

女性は常に武装組織の一部分でしかなく、（男性に）抑圧されていた。だが今や違う。我々のような攻撃的女性組織が、まさに存在し始めたのだ。　〈ローテ・ツォラ〉



クルド人民解放軍の女性兵士たち

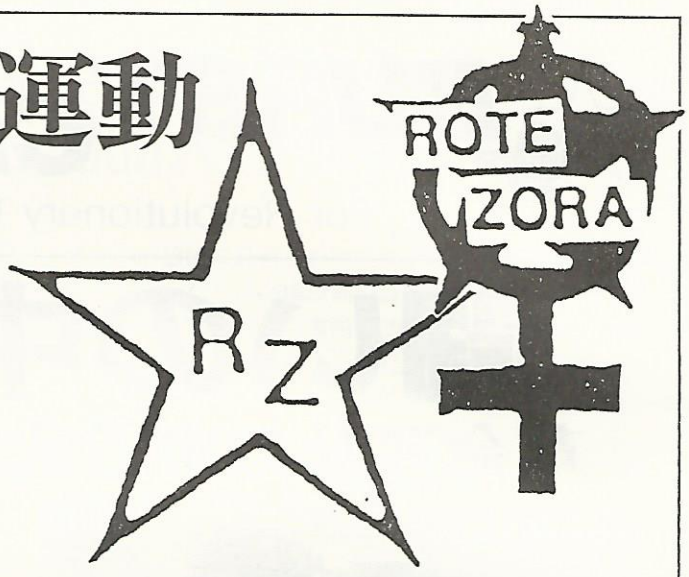
≪今号の内容≫

【特集１／革命運動の中で武装し闘う女性たち】
★武装せる抵抗運動～ＲＺ（革命細胞）とローテ・ツォラ略史★ＥＺＬＮ女性司令官とのインタビュー～闘いの中の闘い
【特集２／クルディスタン解放闘争】
★ＰＫＫ総書記挨拶★ＡＲＧＫ発表・戦況報告★ドイツ警官15才のクルド人少年を射殺★クルディスタン・レポート

★ギリシャ／アナーキストの武装闘争★メキシコ／ＥＺＬＮ呼びかけの国民民主大会開催★武闘短信

武装せる抵抗運動

RZ(革命細胞)と ローテ・ツォラ略史



西ドイツにおける武装闘争

レボリュチオネーレ・ツェレン／ＲＺ（革命細胞）の戦闘として記録されている最初のものは、1973年11月16日、チリ軍事政権に加担する多国籍企業ＩＴＴ社（西ベルリン）に対する攻撃である。1974年には、ＲＺ女性部隊が、カールスルーエの西ドイツ連邦憲法裁判所に対し、高性能爆薬による爆破攻撃を敢行している。これは同裁判所が、中絶法第２条項（中絶を原則禁止する）を支持、承認する判決を下したためであり、攻撃は判決の翌日になされた。女性は従来から、自らの身体については、自己が決定できるという権利に照らして、全ての女性が中絶の自己決定を下せる、と主張していた。

ＲＺは、レボリュチオネーラー・ツォルン紙創刊号紙上で、自己の戦いの３つのカテゴリーを紹介している。

１）帝国主義に対する戦い。
２）ドイツ連邦共和国（西ドイツ）内においてシオニストと手を結ぶ機関、諸施設への戦い。
３）労働者、女性、青年の闘争を支持し、これらの敵を攻撃し、処断する戦い。

１個の革命細胞が、たちまちに増殖していった。70年代後半、ＲＺの武装闘争は、当時高揚していた反核運動に合流する。カルカー、ヴィール、ゴルレバン、ブロクドルフなどの各地で、原発と核燃料再処理施設への反対行動が大衆的に組織されており、数千人規模のデモが全国的に拡がっていた時期である。このほかライン・マインでの空港滑走路建設阻止運動（シュタートバーン18・ヴェスト・ベベーグング）なども大きな盛り上がりを見せていた。ＲＺは、1981年５月11日、当時の経済運輸相ヘルベルト・カリーに対し、暗殺戦闘を敢行。

ＲＺ内では、女性メンバーも活動していたが、これとは別に1977年、戦闘的フェミニズム、反家父長制を掲げた女性都市ゲリラ組織ローテ・ツォラが主体的かつ独立的な戦いを開始した。

「女性は常に武装組織の一部分でしかなく、（男性に）抑圧されていた。だが今や違う。我々のような攻撃的女性組織が、まさに存在し始めたのだ。現在の数は少ないものの、必ず増えるであろう…」＜ローテ・ツォラ＞

ローテ・ツォラは、世界で女性を抑圧、搾取する男権社会の象徴たる家父長的機関、企業、人物を標的として武装闘争を展開。ポルノ業者、セックス・ショップ、国際規模で女性を売買する商人たち（すなわち西ドイツの男に、アジア人を「花嫁」として輸入していた業者）、さらには避妊手術を強要する医師や、医師協会（『連邦医師協会は、白衣の強姦魔である』ローテ・ツォラ）、女性の身体に影響をもたらす製品を生産していたシェリング社などの製薬会社、ならびにコンピューター関連企業、ニクスドルフ社や多国籍企業ジーメンス社などを攻撃対象とした。他方、バスや市電のキップを偽造、配付したりもしていた。

ローテ・ツォラとＲＺは、個別の課題で、時として共闘している。1984年の平和運動に対しては、これを批判する声明を共同で発表している。「これまでの平和運動は、黙示録のビジョンの下になされているブルジョア運動であり、主要な誤りは、『城内平和』を求めることに眼目がおかれてきたことである。一方、軍拡と危機の構造、第三世界の悲惨と公的扶助費削減の関係、セクシズム（性差別）とレイシズム（人種差別）の関係という、帝国主義の総体情況については何らの議論もなされてはこなかった」。

今日の反帝国主義運動

この４年間、ＲＺは（旧）西ドイツにおける外国人と移民問題を主要課題として活動してきた。「我々はドイツ連邦共和国において、具体的な形で反帝闘争に寄与できることを望むものである…。反帝闘争とは、単に軍事産業などへの攻撃だけを意味するものではなく、全世界の解放運動、いやそれ以上のものなのである」。

ケルンの外国人登録センターや、ホレンブルク（西ベルリン入国管理警察責任者）への攻撃などが戦われた。

このように、ドイツ連邦や西ベルリンにおいて、人種差別に基づく難民政策の直接責任者に対する攻撃を加えるとともに、これらを代表する諸機関、施設も狙い、国家管理用の資料、ファイル、データ類をことごとく破壊した。

「もし、ラディカルな左翼勢力が、反帝闘争の新たな始まりに寄与しないのであれば、我々の行動は無意味でみ

じめな失敗に終わることだろう」。（ＲＺ）

70年代初頭以降、ＲＺとローテ・ツォラは、のべ 200件に及ぶ戦闘を行なっている。ローテ・ツォラの、最も広範かつ成功した攻撃は、アドラー社を狙った連続火炎攻撃であった。アドラー社とは、当時、韓国やスリランカに工場を置き、現地女性労働者を低賃金で働かせ、ドイツ国内では安価に衣類を販売していた西ドイツ最大の繊維服飾企業である。

「韓国アドラー社の女性労働者は、労働管理、搾取、日常繰り返される性差別に対して闘っていた。彼女たちは、ドイツからの連帯の声を待ち望んでいた。（第三世界の）３つの大陸における女性の悲惨な生活と労働環境、とりわけ韓国、スリランカでのアドラー社の悪行が、同社小売店前でのビラ、パンフ配付や抗議行動を通して知られることとなった。これらの行動を通じて、反帝闘争が、実践的なものとなりえたのだ」。＜ローテ・ツォラ／アドラー社攻撃に関する声明＞

のちに発表された声明でも、このアドラー社攻撃が戦略的に正しいものであったと、繰り返し具体的に述べられている。「人権運動団体（テレ・デス・フェメス）や自主的なキリスト教組織などのビラ、パンフなどで、問題意識はすでに認識されるものと成り得ていた。ゆえにこのための事前準備がなされてきたのだ。管理、抑圧されていた韓国の女性労働者は、自らを守るために闘っていた。」「彼女たちは、最低賃金の保障、解雇反対、労働環境改善、ドイツ人工場管理者による性差別への抗議を掲げ、ストライキ闘争に起ちあがった。（韓国女性労働者の）かの地の闘いと、（ローテ・ツォラの）この地の闘いが、互換性を持つものと成り得たのだ」。「我々は、第三世界の女性たちのために戦っているのではない。我々自身が彼女らと共にあるのだ」。

1987年には、西ベルリンでローテ・ツォラと諸作戦を共にしていた姉妹グループ「アマゾーネン」が、アドラー社の店舗10件に対し、連続火炎攻撃を敢行し、数万マルクの損害を与えている。これら一連の戦闘の結果、アドラー社は、女性労働者の要求を聞き入れざるを得なくなったのである。ローテ・ツォラとアマゾーネンの戦いにより、武装闘争が実際的に有効であることが証明されることとなった。

攻撃対象の選定にあたっては、ＲＺ、ローテ・ツォラとも内部の権力的作風を排除し、反集権的決定システムを貫徹していた。また、戦闘的直接行動を、革命運動そのものの一部であると位置づけてもいた。メンバーらは公然闘争、社会運動にも広範にも参加していた。ビラ配り、デモ参加、座り込み、出版物発行、大衆への呼びかけ、住宅占拠、労働現場でのストライキ闘争などの闘いと、実に同じ地平で、武装闘争があったのである。

「行動に際して我々は、組織内部にヒエラルキー構造を持ち込みはしない。ヒエラルキーのもとに戦いの思考がなされるなら、それは不可避的に特権や家父長制的思考方法へと変質することとなる」。＜ＲＺメンバーとのインタビュー／アウトノミイ誌－1980年＞

ＲＺやローテ・ツォラの他にも、西ドイツや西ベルリンでは様々な独立戦闘グループが、革命運動の構成機構として存在し、活発な戦いを展開していた。多くは1980年代の社会大衆運動から登場した。互いに個別課題ごとに活動し、ＲＺやローテ・ツォラと同様の組織形態をとっていたものの、長期にわたって存在しはしなかった。1986年、ブロクドルフ原発、バッケルスドルフ核燃料再処理施設への反対運動が高揚し、反核運動のデモには数千もの人々が参加した。様々な戦闘的細胞が、 2～300件にも及ぶ攻撃を、原発関連企業に対して連続的に加えた。なかでも、ブロクドルフ原発の送電ケーブル切断は広く知られる闘いとなった。現在では解散した組織や、他の組織と結合して別の組織を形成したものもあるが、一部の戦闘的グループは、今も存在している。あまた存在した武装グループを列記するのはとても不可能であるが、おもなグループを以下に紹介する。

ERKLÄRUNG ZUM ANSCHLAG AUF DAS BUNDESVERFA
GERICHT
4.März 1975

Frauen der REVOLUTIONÄREN ZELLE haben am 4. Mär
schlag auf das BVG gemacht.
Nicht um die "Verfassung gegen das Verfassungsgerich
Herr Abendroth meint, sondern um uns vor dieser Ver
Einer Verfassung, die den legalen Rahmen liefert für di
tung, Zermürbung und psychische Zerrüttung von
Männern. Einer Verfassung, die Frauen illegalisiert
- wenn sie sich nicht von der Ärzte- und Richterm
Umgang mit ihrem eigenen Körper, die Zahl ihrer
sen.
Wir stimmen nicht in das Gejammer darüber ein
tisch zustandegekommenen Gesetzentwurf des
weil es keinen nennenswerten Unterschied me
die Existenzbedingungen von 60 Millionen M
Wir machen allerdings unter den gegenwärt
nauen Unterschied zwischen dem Grad d
die diese Handvoll aus Steuergeldern bezi
erlassen.
Und das Terrorurteil des Bundesverfa
verbot in Übereinstimmung mit der be
Grundordnung" erneut zu Recht und
achtung und -vernichtung so unerir
kämpfen werden.
Wir Frauen sollen weiter dazu ge
Welt zu setzen, in der schon gewi
die lebenslängliche Verkümmer
- vom Kinderkrippenghetto übe
- kasernierí in Kleinstwohnun
- erdrückt in notgedrungen k
- gezwungen zu individuelle
Eltern, die

REVOLUTIONÄRE ZELLE

ROTE ZORA

Das Leben ist eine Frau
und ihre Augen
mal zornig mal heiter
sie nimmt sich die Waffe
die ihr paßt
und sagt dir
der Kampf
geht weiter

KAMPF DEM IMPERIALISTISCH-PATRIARCHALEN SYSTEM!

FRAUEN ERHEBT EUCH UND DIE WELT ERLEBT EUCH!

am 28.4.1977 haben wir uns die nacht zurückerobert; die bundesärz
mer in köln kann nach unserer vorarbeit jetzt ihren frühjahrsputz halt
die bundesärztekammer vereint die macht der gesamten ärzteschaft
desärztekammer, verschiedene ärzteverbände (z.b. den hartmann.
die kassenärztliche vereinigung.
das war unser beitrag zur walpurgisnacht. in der walpurgisnacht zum
demonstrieren überall in der brd frauen gegen vergewaltigung - eine fo
der gewalt, die wir frauen tagtäglich in der familie, in der werbung, im be
trieb, auf der straße und beim frauenarzt erleben.
wir verstehen die bundesärztekammer als vertreter der vergewaltiger in
weißen kitteln, die sich über unser selbstbestimmungsrecht hinwegsetzen und
mit unseren körpern profit machen wie die großen chemie-konzerne. die
handlanger der chemie-konzerne in gestalt der arzneimittelkomission sitzen
unter einem dach mit dem ärztepack.
verlust ihrer einnahmen durch illegale abtreibungen und mit
lichen körper weh

ＲＺ、ローテ・ツォラの戦闘声明

攻撃されたアドラー社施設所在地

◆レボルチオネレ・ハンドベルカー（革命的手仕事人）
原発送電ケーブル切断破壊戦闘など。現在は活動していない。
◆アマゾーネン
ローテ・ツォラの姉妹組織ではあるが、活動は独立している。最近、同組織メンバー２人が投獄された。
◆ツォルニゲ・フィレン（怒れるウイルス）
1981年１月、ダルムシュタット大学遺伝子研究センターを攻撃、 200万マルクの損害を与える。
◆アウトノーメ細胞
アーロイス・ゾネンライトナー（ＡＳ）
アウトノーメ反核細胞。原発関連会社ホフマイスター社ビル、建設機械、トラックへの火炎攻撃。現在も活動している。グループ名は、86年バッケルスドルフで警察に虐殺された活動家名に由来。
◆レボルチオネレ・フィレン（革命的ウイルス）
遺伝子工学研究機関、バイオ関連施設などに対する戦い。
◆アンチ・ラシスティシェ・ツェレン（反人種差別細胞）
シェル石油に対する連続攻撃戦闘。
◆ケンプフェンデ・アインハイテン（戦闘細胞）
軍事関連産業の攻撃を行なう。反帝国主義武装細胞。同部隊内細胞クレスポ・セパ・ガレンデは、国境警備隊施設への攻撃などで知られる。同細胞名は、スペイン治安当局に虐殺されたＥＴＡ（バスク祖国と自由）メンバー名に由来する。

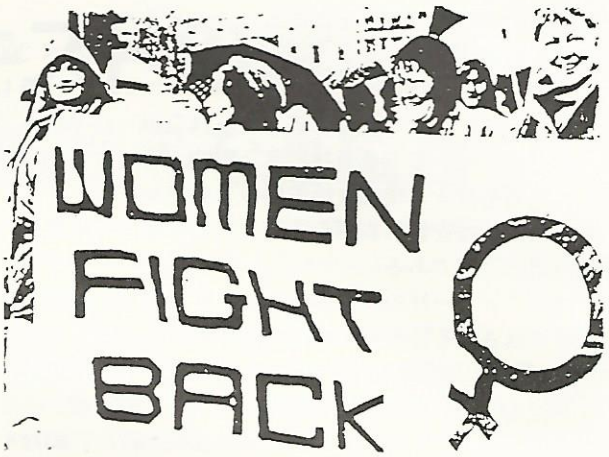
これら戦闘的直接行動グループには、社会運動のリベラルな組織も含めて、各戦線から広範な支持が寄せられた。これら地下細胞は、大衆運動に依拠するとともに、その運動内部でも活動していた。ローテ・ツォラには、セクシズム、中絶をめぐる女性管理に対する闘いに取り組むフェミニズム運動から大きな支持が寄せられた。

そうしたなか、ＲＺは、自らの戦略、方針、闘いなどについて述べた本「成功への道程」を発行。全部で3000部が印刷されたが、この本が左翼系書店に並ぶやいなや１週間とたたないうちに完売となった。

ＲＺやローテ・ツォラの高度なレベルの効果的な作戦は、大衆の支持なしには成功しえなかったものの、彼／彼女ら自身は、「我々の戦いは、自らを闘争から疎外するものでしかなかった」と総括を行なったこともある。

ＲＺ、ローテ・ツォラのメンバーらは、地下非合法闘争グループメンバーであることを公にすることなく、公然大衆運動でも活動していた。これを可能にしたのは、大衆運動の強固な支持があったがゆえである。

多くの戦闘にもかかわらず、ローテ・ツォラは、これまでに女性１名が逮捕されただけである。（証拠不十分により起訴取下げ処分）一方、ＲＺ弾圧では、この17年間で、多くの有罪判決が下された。1989年６月９日、イングリッド・シュトローブルが同メンバーであるとして懲役５年の判決を受けている。一連のＲＺ弾圧の中では彼女への判決が最も重いものであった。獄中者支援運動は重要な闘いであった。ばく大な時間を費やさざるを得



ない課題ではあったが、大衆運動がこれに加わったために、ＲＺ、ローテ・ツォラは武装闘争を継続して戦うことが可能であった。

「ドイツ赤軍派メンバー」としてのデッチ上げ

他にも武装組織メンバーとして逮捕された者には、重刑攻撃が加えられた。ドイツでは反テロ法規定により、「ドイツ赤軍派メンバー」とされれば、それだけで重罪となり、また一般刑事事件での求刑も強化される。ゆえにＢＡＷ（ドイツ連邦検察局）は、全てを「ドイツ赤軍派メンバー」と「認定」するデッチ上げ攻撃を行なったのだ。

▷エリク・プラウス、アンドレア・ジーフェリング
反テロ法により「ドイツ赤軍派メンバー」とされ起訴。軍事産業ドルニエル社への爆破事件の「実行犯」の容疑もかけられた。1989年１月18日、９年の刑が確定。
▷ノルベルト・ホフマイヤー、バーバラ・ペラウ、トマス・ソーネ、トーマス・リヒター
「ドイツ赤軍派メンバー、爆弾犯」として一斉起訴。1989年１月20日、ホフマイヤー／10年、ペラウ／９年、ソーネ／９年、リヒター／４年の判決がそれぞれ下された。同裁判の裁判長は、イングリッド・シュトローブルに５年の判決を下した人物。
▷フリッツ・シュトリム
学校教師。アウトノーメのニュースジャーナル紙ＳＡＢＯＴの発行メンバー。「ドイツ赤軍派を支援していた」として起訴。

ドルニエル社爆破や、国境警備隊施設爆破では、武装細胞ケンプフェンデ・アインハイト（戦闘部隊）が、戦闘声明を出していたが、さらなる重刑攻撃を加えんとするＢＡＷや裁判所は、一体となって同細胞を「赤軍派内の組織」とデッチ上げた。エリク・プラウスとアンドレア・ジーフェリングの公判では、収監中のドイツ赤軍派メンバー、エヴァ・ハウレが自ら証言台に立ち、「この４年間に逮捕された者のうち自分だけが実際に赤軍派メンバーだったのであり、他の12人は関係ない」と、ＢＡＷのデッチ上げを告発した。

EZLN女性司令官たちとのインタビュー

闘いの中の闘い

ラモーナ（ツォツィル／ＥＺＬＮに参加したチアパス州に居住するマヤ系先住民族の一つ。訳註）は、先住民族地域の女性委員会の代表である。アナ・マリーア（ツォツィル）は、叛乱軍の歩兵部隊少佐である。彼女は戦闘に従事している女性の代表であり、千人を越える女性兵士たちの司令官でもある。ラモーナは政治的任務をもって先住民族の村に住んでいる。アナ・マリーアは、10年以上も前から、その生活を闘いに捧げ、「山の中」に住んでいる。

二人の女性は、どのようにして彼女らの村で伝統を断ち切ったのか、ＥＺＬＮの政治的、軍事的活動に参加したのかを語っている。また、どのようにして彼女たちの権利のために闘うべく団結をし始めたのか。男性と同等の権利を保証し、彼女たちの要求を守る１月１日の「女性の権利」を彼女たちが審議し全体で承認した時、どのように革命の中の革命を進展させたのか。その法を認めるのを拒んだ同志もいた。しかし、彼女たちは闘いを続けて勝ったのである。１月８日からの調査によって、ＣＣＲＩ（先住民族地下革命委員会）は彼女たちの法を承認した。多くの男性たちは驚いた。何故ならそれは、女性を疎外し、政治的過程から排除する古い伝統を打ち破るものであったからである。この日は女性の記念日であった。彼女たちは歌い、踊り、歓呼した。彼女たちは闘いに勝ったのだ。それは、全ての人々に変化をもたらすものであった。

【Q】運動の中で、女性の参加はどのように始まったのですか？

【ラモーナ】女性がその境遇を理解し、それを変えたいと望んだ時、彼女たちは参加し始めました。普通、彼女たちは決して認められることはありませんでした。戦闘に参加する女性の数は少ないけれど、彼女たちは、その地域社会で活動しています。女性の要求は、これまで決して真剣に取り上げられはしませんでしたが、私たちは尊厳、正義、民主主義を要求しています。女性の生活環境は、先住民族のそれより悪く、私たちのいっさいの尊厳は無視されていました。私たちは尊厳をもって生きたいのです。私たちは特別な産院を必要としているのですが、たよる所を知りません。病院もなく、医者もいないのです。私たちには教育もなく、食物もなく、道路もなく、何の援助もありません。境遇を変える希望はあります。これが、我々の叫びであり、参加した理由です。

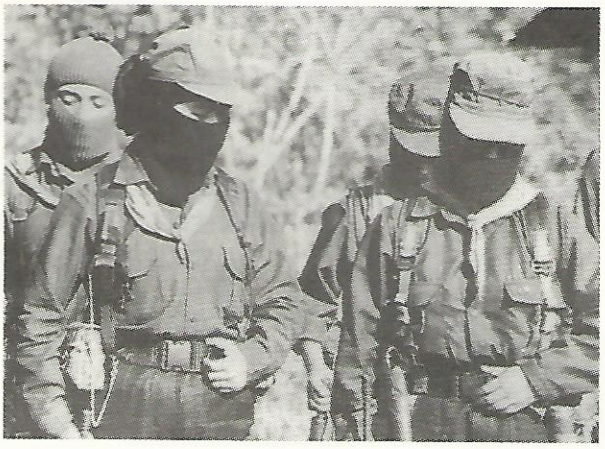
【アナ・マリーア】男性と女性は、土地の権利のために闘っています。これが私たちの主要な要求です。女性は多くの時間を農地で過ごすことはほとんどありませんが、農民は農地なしには生き残ることは出来ません。私たちは、男性が農地を耕してコーヒーを収穫するのを助けます。未亡人たちは、自ら農地を耕さなければなりません。まるで男のように。女性たちによって作られた要求項目の何点かは、男性が決して考えもつかないもの、思いもよらないものです。しかし、それらは女性にとって欠くことの出来ないものなのです。この境遇が、私たちの要求となったのです。例えば、女性が学ぶことの出来る特別な学校を、という要求です。たとえ年をとってはいても、彼女たちは今でも読み書きを学びたいのです。私たちは産院を要求します。そこでは出産がとても安心だからです。家では、新生児はホコリだらけの地面に横たえられ、へソの緒はマチェーテ（山刀）で切られます。これは通常男性が仕事で使うものです。環境は本当に悪く、子供が病気にかかるのを防いだり、女性に供給する必要な物資を誰も持っていないのです。私たちには、婦人科医が必要なのです。

さらに私たちは、手工芸刺繍の仕事を助ける作業所と機械、そして工芸品を販売する市場を必要としています。女性たちが町の工芸品店主から受け取る代金は、微々たるものだからです。先住民族女性は不当に扱われています。不正義、差別、レイシズムはありふれたことです。サン・クリストバルでは、特にひどいです。さらに別の要求は、保育所と予備学校が必要だということです。そして、私たちは飢えた苦しむ子供のために食料を必要としています。

政府の法律は、女性の不動産所有権を規定していませんが、私たちの法では可能であり、彼らにこれを受け入れてほしいのです。私たちは自分の土地が欲しいのです。今日のような石ころだらけの山ではなく、良い土地をです。

ラモーナは言う。地域社会での闘いについて話し合いがある時、女性のことなど以前はほとんど軽視されていた。それは１世紀も昔の慣習的抑圧であった。しかし、村人たちがやがて自らを徐々に組織しだすにつれ、女性

サパティスタ民族解放軍の女性兵士たち



もまた自ら組織しなければと自覚したのである。その結果として、彼女たちは、男性がしたように、闘う権利、参加する権利を手に入れた。以前女性は、会議に参加することさえも許されていなかった。しかし、とにかく彼女たちは集い、学び、会議に参加した。彼女たちは闘い続け、女性革命法を求めるまでになったのである。

【アナ・マリーア】既成の法律は女性のことなど考慮していないから、私たちは異議を申し立てたのです。同志たちが法案を作り、それは委員会に提出され、誰もそれに反対しませんでした。次にこれは、また別の地域社会に提出されました。そこで、他の女性たちによって討議され、提案と意見が集められ、そして女性法が出来たのです。

【Q】先住民族女性の暮らしはどうですか？
【アナ・マリーア】女性は余分な時間を持たず、一日中働いています。男性の朝食を用意するために、田舎の女性は午前3時に起きます。木が必要なので、それを集めに行きます。コーンが必要なので、採りに行きます。いつも背中か胸には子供を抱きかかえているのです。戻った彼女は食事の支度をし、家事労働をこなします。こうして一日を過ごすのです。月曜から日曜までです。男性は少なくとも日曜には休むことができ、カードやバスケットをします。しかし、女性はできません。彼女は一日中、一週間まるまる休みなしに働きます。彼女たちは楽

食事の準備をする先住民族女性

しみを少しも持っていません。まったくないのです。
【ラモーナ】女性は学校や娯楽に出る機会はほとんどありません。若いうちから、私たちは兄弟の世話をします。トウモロコシを挽くのを手伝い、トルテージャを作り、床を掃いたり洗濯をします。もし母親が赤ん坊を家に残していけば、兄姉はその世話をしなければなりません。彼女は学校に行くことが出来ないのです。これは、私に起こったことなのです。女性は、家族や慣習に強いられて、13〜14才で望んでもいない結婚をさせられてしまうのです。こうして、パートナーを自由に選ぶ権利が女性法に記載されました。この法律は、先住民族社会の状況ゆえに承認されたのです。もし、ある若者が少女を好きになっても、彼は彼女の所へは行きません。しかし、酒食を彼女の父親に贈り、もし父親が受け入れたら、その時少女は、その若者に売られるのです。彼女の意志に反して、彼女は男性との結婚を強いられるのです。多くの女性は目に涙をためて「財産」となるか、そうでなければ修道女になっているのです。村では、結婚をせずに、他の人と一緒に暮らすことは出来ません。それは罪悪であり、慣習に反することなのです。もしそれが知れたら、両人とも罰せられるでしょう。彼らは刑務所に入れられるか、バスケットボールコートに吊るされるのです。地域社会が充分だと考えるまで。

【Q】どのようにしてＥＺＬＮに参加したのですか？
【ラモーナ】私が武装闘争に参加したのは、仕事を探して村を離れた時です。街で、徐々に田舎の女性が置かれている境遇が見えてきたのです。これは都市での状況とまったく違ったものだったのです。私は自らを組織することを徐々に自覚しました。先住民族は、都市ではまったく見下されているからです。私たちが生産物を売っていても、彼らはまともに扱ってくれず、ちゃんと払ってはくれません。そして私たちは、ほとんどタダ同然で引き渡さなければなりません。都市では、私たちは歩くことも出来ません。私たちは蔑まされ省みられることはないのです。こうして、私は境遇を自覚したのです。
【アナ・マリーア】私は、まだとても若い時、14才で参加しました。より経験を積んだ同志たちが、私たちにアルファベットを教えました。彼らは私たちに読み書きを教え、そしてその後、闘い方を教え、追ってもちろん政治についても教えてくれました。人民と如何にして交流するのか、私たちの闘いの理念をどのように伝えるかでした。このように、私は徐々に学びました。何年もかけて、長い話です。小さな子供の頃すでに、私は両親と一緒に政治闘争に加わって、何時もデモに参加していました。私の両親は、ある組織のメンバーでした。私たち子供もそれについて行きました。すでに8才になった私はこの様にしてデモや集会に参加したのでした。こうして私は認識を発展させ、経験を蓄積させました。何十年も闘って来て、何も起きなかったと人々が自覚した時、時は来たのです。政府は彼らの要求に応じなかったのです。そして、武装闘争の準備が始まりました。
平和的な闘争期間中、彼らの要求が拒絶された後、彼

らは大農場を占拠しました。そして、軍隊がやって来て殴打、拷問、虐殺によって彼らを力ずくで排除したのです。この多大な弾圧の後、私たちは言ったのです。「自ら武装し、自身を守らなければならない」。

もし、政府が平和的解決を望まないのであれば、暴力的な解決法をとらねばなりません。これが全ての開始の理由なのです。最初、10年前ですが、私たちはＥＺＬＮの中の二人の女性でした。それは８～10人の小さな組織でした。やがて、多くの人々が参加しました。彼らは問題と必要性を理解したのです。戦線は自動的に満たされました。中隊を形成することが出来るまでに、後には大隊、その後には連隊、そしてもっと。それから、人々が自分たちは充分強力になったと自覚した時、時は来たのです。そして私たちは武装闘争を開始しました。女性たちは、私たちがＥＺＬＮで活動しているのを見て参加しました。彼女たちは、その娘たちに、姉妹たちに、孫たちに教え始め、銃をとり闘うべきことを伝えたのです。ＥＺＬＮのおよそ20～30％は女性です。私たちは闘い方を学び、村で政治活動を行ないます。すべて男性がするのと同じことを、です。それぞれの村で、私たちは女性グループを作り、共同作業を組織します。既に読み書きの出来る女性たちは、他の人たちに教えています。この仕事は何年もかかるでしょう。

たくさんの同志が武装闘争に参加したがります。しかし、彼女たちは結婚し、子供もいます。今、もちろん彼女たちは参加していますが、武器は使いません。村での女性の任務は、女性グループを組織することです。共同労働や学習グループを導入し、サパティスタ軍を支援するのです。何故なら、彼女らの子供や配偶者が闘っており、すべてが関連してくるからですし、さらに、山中にいる人々が充分に食べられるようにするためにです。彼女らの任務は、トルテージャ、ピノル（煎ったトウモロコシや小麦を挽いて甘味をつけた食物）、ポソレ（トウモロコシ、豚肉、野菜、とうがらし等の煮込み料理）を作り、野菜を収穫し、物資をキャンプへ運ぶのです。彼女たちは活動を分担し、自身を組織するのです。私たち若い女性は闘い、年配の人たちは子供の世話をします。

【Q】あなた（アナ・マリーア）は、叛乱軍でラモーナは政治的代表者です。何が違うのですか？

【アナ・マリーア】違いはありません。私たちは同じ闘いを担っており、ＥＺＬＮの一部分なのです。違いと言えば、叛乱軍は家族と離れ、もはや生活を共にはせず、すべてを闘いに捧げているということです。彼女はもはや家族とは会わず、その仕事を手伝うこともまたありません。

ラモーナは彼女の村に住み、居住地での重要な女性グループと活動を代表しています。私は他の叛乱軍と共に住み、仕事は闘いに身を捧げることにあります。私たちの闘いは、男性と同じものなのです。けれども以前は、共通の要求だけが提案されていました。今は、女性の特別な要求が存在しているのです。

サパティスタ民族解放軍の女性兵士

【Q】どのように、あなたたちの要求が認められるための闘いの中の闘いに至ったのでしょうか？

【ラモーナ】女性は参加を認められず、会議や総会では軽視された存在だと認識した時、私たちは何が出来るのかを考え始めました。こうして私は、語り、組織することに参加し始めたわけです。直に女性は自分の立場を自覚し、女性が代表に任命されることが必要だと知ったのです。私たちは、女性が参加することが出来、私たちの活動に何か良い進歩をもたらすということに気づきました。例えば私は、地下革命委員会（ＣＣＲＩ）のメンバーになりました。ＣＣＲＩの中で、私は多くの女性を代表しています。そして私の仕事は、組織の情報を私たちの言語に訳すことです。

【アナ・マリーア】私の組織では、武装した男女は互いに尊敬し合っています。しかし村では、男は女を酷使することが出来るという古い考え方か、いまだ主流です。軍では、女性は男性と同じ地位に就くことが出来ます。私は歩兵少佐で、軍団の司令官です。もし、同志たちがサパティスタ軍に加わったら、彼女たちは規律と市民意

サパティスタ民族解放軍の女性兵士

識を教育されるでしょう。女性は尊敬され特別な位置を得ているのです。

私たちもまた、こうして地域社会の中で活動しています。私たち「叛乱軍」は村に入り、人々に平等と市民意識を教えます。それは、女性を平等に扱うべきであり、同等の機会を与えるべきだといったことです。

ラモーナは、地域社会の中で責任を引き継ぐのはとても困難なことだと気づいています。男性は様々な地位に用いられているからです。最初は男性だけが、私たちの組織した集会や教育過程に参加していました。男性は学ぶ機会が与えられているが女性はそうではないことに、そのころ、女性たちは不満を言い出しました。例えば、男性が戦闘訓練に行く時、女性たちは、何故男性だけが行くのかと尋ねました。彼女らもまた、闘い方を学びたいのだと。これがたくさんの「女性兵士」が私たちに参加した理由です。彼女たちは自分の村に住み、闘わねばならない時に、まさにそうするのです。私たち「叛乱軍」は村から村へとまわり、そして、戦争技術、政治や教育を人々に教えます。彼女らは、自分自身を守ることを学び、そして言います。これは、今だかつて教えられもしなかったことだ、と。少なくとも女性には、そうなのです。例えば同志ラモーナは、ここにいて話をしています。彼女は、自身の言葉（ツォツィル語）で話しています。彼女のスペイン語はあまり上手じゃないからです。しかし彼女は、いずれにせよ彼女と同じ出身の人々の女性を代表しているのです。

私は、サン・クリストバルでの対話のための代表に、私の部隊によって任命されました。それは、ラモーナも同じです。多くの人々は、彼女を「司令官」と呼びます。彼女は総司令部（サパティスタ民族解放軍総司令部先住民族革命委員会＝ＣＣＲＩ－ＧＣ／ＥＺＬＮ）に所属しているからです。しかし、これは階級ではありません。ＣＣＲＩのメンバーは軍事部門のメンバーではありません。私たちが軍事的階級を担うということは、私たちがＣＣＲＩに命令することを意味するわけではなく、彼女（彼）らが、私たちは何をすべきなのかを決定するのです。ＣＣＲＩが、私たちが闘うべきか否かを決定するとしても、彼（彼女）らは人民に問い、そして、人民が、私たちはこうすべきか、ああすべきか言えば、私たちはそれに従うのです。

【Ｑ】叛乱軍内での恋愛についてはどうですか？
【アナ・マリーア】私たちは、お互いに愛する権利を持っています。この配慮のもとに平等が実践され、私たち女性は尊重されているのです。もし、女性が結婚したいのなら、彼女は同志と恋愛しているのですから、彼女は上官のところへ行き、彼女たちは一緒になることができるかどうか尋ねます。それは男性も同じです。彼女（彼）らは許可を願うのです。司令官は、それが可能かどうか、また、男性・女性にすでに他の人がいるかどうかを見て、判断するのです。

【Ｑ】あなたは結婚していますか？
【アナ・マリーア】ウーン、知りません。
【Ｑ】誰かと一緒にいますか？
【アナ・マリーア】はい。
【Ｑ】ラモーナは？
【ラモーナ】はい。
【アナ・マリーア】私たちは、徐々に互いを深く知り合う機会があり、一緒になり、そして、そうしたいと望んだら結婚するのです。ＥＺＬＮでは、特別な結婚式があります。全てのメンバーが集まり、司令官が結婚を希望する人たちの名前を読み上げます。この後、二つの場合があります。二人が、司令官の書いた書類にサインするか、一緒になる許可を簡単に願うかです。私たちはこれを「ユニオン」と呼びます。もし、信仰のある人がいれば、その時は、彼、もしくは彼女は、祭壇の前で結婚することも出来ます。

わたしたち「叛乱軍」は、子供を生みません。24時間活動し、自由に動き回らなければならないからです。私たちの任務は人々のために闘うことで、山の中で「子供の命」にリスクを負わせることは出来ません。私たちは家族計画を常に行なっています。しかし、もし同志が、どうしても赤ん坊が欲しいのなら、そうする自由があります。その時、彼女は家族の所へ帰り、後に戻って来ます。もし、彼女が望めばですが。闘いを止めないために、彼女は子供を家族のもとへ残すでしょう。

【Ｑ】ＥＺＬＮの中での女性の任務とは何ですか？
【アナ・マリーア】ＥＺＬＮの発展以来、安全のための女性の任務はとても重要でした。それぞれの村で、私たちは警戒区域と情報ネットワークを設けました。もし、兵隊が来たら、女性たちは無線を使い、危険を省みずに人々に知らせます。この活動は、主婦によって行なわれています。私たちが都市部を攻撃した時、これは彼女たちの任務でした。彼女らは、村を、子供を、村人を、そして闘っている息子や娘を守るのです。

軍に必要なものはすべて、自力でまかなわれています。

私たちは、洋服屋と兵器工場を持っており、そこでは、もちろん女性たちが働いています。彼女たちは、自らを守るために兵器の部品や小さな爆弾を生産しています。この仕事は誰にでもできることです。たとえ、彼もしくは彼女が闘っていなくてもです。ここでは、全ての人々が平等で区別はありません。ある日は男性が食事の支度をし、別の日には女性がするのです。

【Q】死についてどう思いますか？

【ラモーナ】もし死が必要であるというのなら、戦闘で死ぬのが良いです。もし、理由が正当なもので、それが人々のためになるのならば、死ぬのは良いことです。見たところ、正義を見いだす他の方法はないからです。私は闘い続ける覚悟は出来ています。

【アナ・マリーア】何て答えたらいいのか。死ぬことをイメージできないのです。おそらく、私たちが存在し得たことはないし、あるいは、深く考えすぎていたのかも知れないでしょう。まさしく、私たちが平和的に闘っていた時でさえ、たくさんの人々が村で殺され、たくさんの先住民族が食糧の欠乏や病気で死にました。それは、まるで戦争国家に生きているようです。あまりにもたくさんの死者があるからです。今、私たちは死に続けています。殺されているからです。しかし、何人かの死は必要かもしれません。かつてこの国に存在しなかったもの、自由と尊厳を獲得するために、自分を犠牲にすることは必要です。

私たち女性は闘いを確信しており、また、死の観念が変わるものでもないとも確信しています。治療可能な病気（コレラ、麻疹など）で子供たちが死ぬのを見るのは、とても痛ましいことです。政府は、それを否定しているのです。

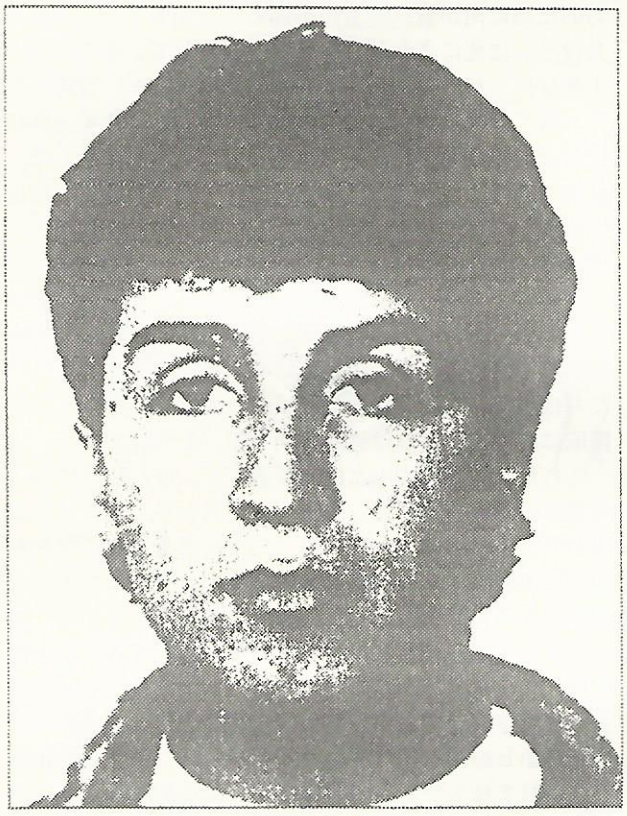
私は、二人の少女が私の腕の中で死ぬのを見たことがあります。私たちは何もしてあげられませんでした。彼女らの母親は最初に死にました。そして私たちは、少女らのために何か食べるものを得ることができず、彼女たちはついに死にました。まさに、そうして、その二人の子供は死んだのです。何千人もの子供たちが、食糧の欠乏と病気で死んでいます。これは間違っています。平和的な闘いの期間中、たくさんの子供たちが死にました。病気の流行によって、数えきれない子供たちがこの世を去りました。これが、わたしたちが武装闘争に向かった理由です。

たくさんの女性たちが闘うことを決意しました。彼女たちの村では、わずかの権利もないからです。教育の権利がなく、目隠しされて新しいものを学べません。彼女たちは虐待され、搾取されているのです。（男性による搾取に加えて、女性は男性と同じ搾取を経験する）。

これが、村と国中の女性の境遇です。彼女ら全ては、同じ不平等と疎外に苦しんでいます。しかし同時に、家事労働と子供の養育とは別に、様々な事をする彼女たちの能力を、私たちは理解しています。彼女たちは学ぶことができるのです。こうして、私たちは知りました。闘いに参加している女性、かつて読み書きのできなかった女性、どちらも学んだのです。私たちは、たくさんのことをする事ができます。私たちは能力を持っているのです。しかし、誰も私たちに教えなかったし、学ぶ機会を与えられませんでした。彼らは、私たちを物のように、価値なきもののように扱ったのです。これが、私たちが闘いに加わった理由です。

解放区を巡回するサパティスタ兵士たち

ドイツ警官が15才のクルド人少年を射殺



虐殺されたハリム・デネール少年

6月30日の深夜、ドイツのハノーバー市で、15才のクルド人亡命申請者が私服刑事に後ろから狙撃され殺害された。

この若者ハリム・デネールは6週間前の5月末に、トルコのビンゴル地方パルジューク村から家族とともにドイツにたどり着いたばかりであった。彼の住んでいた村がトルコ軍に追い立てを受けて破壊されたために、亡命して来たのである。

その夜、少年は5人の仲間たちとERNK（クルディスタン民族解放戦線）のポスターを貼るために外出していた。パトカーが近づいて来たために、一旦散り散りに身を隠し、それが通り過ぎた後またポスターを貼り続けていた。その時突然、2名の私服刑事が彼らを逮捕しようと襲いかかって来たのである。逃げる少年たちに向かって私服刑事は発砲し、ハリム少年は後ろから撃たれて死亡した。

ハリム虐殺の後、7月2日には、自然発生的な抗議行動がドイツ各都市で行なわれた。ハノーバーでは、千人を越える人々が、ハリム虐殺に抗議してデモを行なった。参加者たちはハリムの写真を掲げ、ERNKのポスターと旗を掲げて行進した。ERNKは、PKK（クルド労働者党）等のクルド諸組織と共に禁止されており、デモ隊はこの措置の責任者、カンター内相の辞任を要求した。

7月3日の深夜、ハノーバー、ハンブルグ、マインツ、サーブリュッケン、オスナブリュック、オルデンブルグ、ブラオンシャイグで、警察署と警察車両が火炎ビンと投石で攻撃された。この一連の行動により12台の車両が重大な損害を受けている。逮捕者は7人。ベルリンでは、トルコ系旅行会社が火炎ビンで攻撃され、市の各所で24以上の店舗が窓ガラスを割られた。ハンブルグのトルコ文化センターに火炎ビンが投げ込まれた。

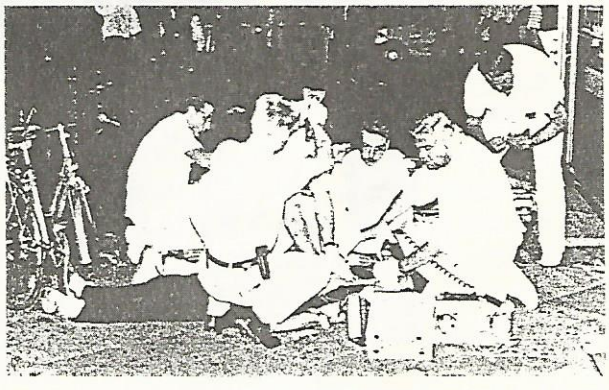
ベルリンにおいては、翌日の4日、約1500人がハリム虐殺への抗議行動を行なった。警官隊は、デモ隊がERNKのポスター（ハリムが殺害された時に持っていたのと同じもの）を掲げていたため、違法行為で弾圧を加えると警告を加えて来たが、デモ参加者はこれに屈せず、ポスターを掲げ、PKK支持のスローガンを叫びながらデモを貫徹した。デモ終了後、地下鉄に乗り込もうとした参加者を警察官が妨害して揉み合いとなり、数人が負傷した。キールでは、PKKの旗を振り、ハリム虐殺を糾弾しながら、約20台の車列を連ねて行進が行なわれた。警察の弾圧があり、11人が逮捕された。同様な抗議行動が、ハンブルグその他の都市でも取り組まれた。

同日、ギリシャではアテネのトルコ大使館を占拠。約50人のERNK支持者たちは、2時間にわたって占拠を続けたあと、占拠を解いた。逮捕者は出なかった。

ERNKはハリム虐殺について声明を発表し、ドイツ警察の全面的かつ無条件の謝罪を要求した。そして、もし謝罪が無ければ、クルドの抵抗運動は「同様の手段」で応じざるを得ないと警告を与えた。これに対してドイツ警察側は、職務質問に抵抗したための措置と開き直っている。

7月9日には、事件現場であるハノーバーで大規模な抗議集会が行なわれた。虐殺されたハリムのポスターや禁止されているPKK、ERNKの旗が林立する中、ハノーバー市長は哀悼の意を表明した。

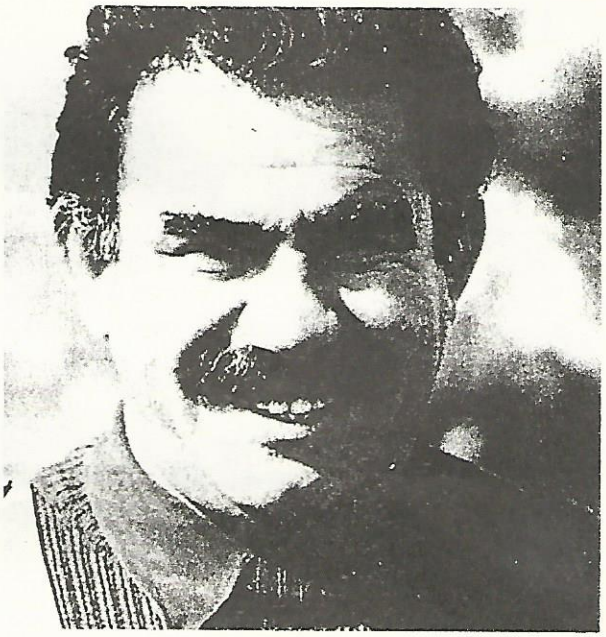
7月22日、故郷の地クルディスタンに埋葬するためディヤルバキルの空港に着いたハリム少年の遺体は、トルコ保安部隊によって強奪された。両親や遺体に付き添って来たドイツの政治家たちは空港に足止めされ、テレビスタッフはホテルに閉じ込められた上での出来事であった。移送先は公表されていない。



現場で救急医療を受けるハリム少年

国際クルド会議でのＰＫＫ総書記挨拶

1994年３月12～13日、ブリュッセル（ベルギー）で、クルディスタン人権プロジェクトとドイツの医師インターによって組織された北西クルディスタン国際会議が開催された。これには35カ国から二百人をこえる人々が出席した。出席したのは、クルドの主要な政党からの代表、多くのヨーロッパ諸国からの国会議員、ヨーロッパと北米からの研究者たちであった。ＡＮＣ（アフリカ民族会議）の代表であるカダール・アスマル博士の連帯挨拶は、大いなる称賛を受けた。２日間の会議の閉会にあたって決議が採択された。会議は、国際的な監視の下での相互停戦の実施について、トルコ政府が速やかに回答するよう呼びかけた。もちろん、トルコが合法かつ人権の言質を履行するまで、ヨーロッパの諸政府ならびにアメリカが軍事的、経済的援助を停止するよう呼びかけた。ＰＫＫ総書記アブドゥラー・オジャランのメッセージが読み上げられた時には、大きな拍手が巻き起こった。



ＰＫＫ総書記アブドゥラー・オジャラン

★ＰＫＫ（クルド労働者党）オジャラン総書記挨拶

最近のクルド問題、とりわけ北西クルディスタン問題の進展は、今や全世界的な関心を得るに至っております。我が人民は、我が党の指導の下に民族的覚醒を成し遂げるために、大きな苦難を被り、大きな犠牲を払っているのです。

トルコ国家の対処は、クルド問題の存在を否定し、これを正当化するためのものであります。これは、歴史的現実を無視するものです。これに対してのあらゆる抵抗の表現は、乱暴かつ残酷に押さえ込まれています。我が人民の自由のための要求は、血の海に沈められているのです。

クルド問題への世界的規模での関心にもかかわらず、いくつかのヨーロッパの国々は、いたずらに解決の達成をより困難にしてしまっています。これは、我が人民に対するトルコの正義なき汚い戦争を助長するものなのです。

我が党は何百万人もの人民の支持を受けており、誠実な解決の模索を考慮に入れなければならないのです。ヨーロッパのいくつかの国の政治的経済的利害は、ＰＫＫをテロ組織だとして禁止することで、かれらの無分別を助長させています。

ＰＫＫは「解決に賛成していない」とか「分離国家以外は考慮に入れていない」という主張は、実際には何の根拠もないのです。

1993年の停戦期間中、私は記者会見でこう言いました。「解決を熟慮することを拒否しているのは、我々ではなく、トルコ政府なのである」。政治日程の俎上では、この種の主張を絶えず維持せんとする試みがなされてきました。私は再度、この会議への我々の立場を明らかにしたいと思います。

我々は、いくつかの国や国際組織からのこの問題についての全提案と全発議への窓口は開いているのです。

我々はトルコ国家の分割に固執しておらず、そのような宣伝は問題への我々の取り組みを反映していないことを、私は強調したいのです。もし話し合いが、我が人民の正当な要求を我々が表現することのできる、民主的枠組みの中での対話に基づくのならば、私は、いつでも出口について話し合うべくトルコ政府と共に席に着く用意があることを申し述べておきます。我々は、解決のための明確な提案に対しては、これに反対したことはありません。我々は、連邦制を含めて、あらゆる代案について討議する準備があります。

もし国際的監視下での相互停戦が履行され、しかも対話が維持されるならば、我々はその過程を回避したり妨げたりする企てはしないでしょう。

加えて何よりも重要なことは、あなた方の会議でなされた、解決を尊重するあらゆる決議を、私が受け入れることを保証いたします。もし、政治的解決と自由な政治活動のための基礎が確立されたなら、我々は軍事衝突の完全な停止に向けた過程を開始することを、ここに私は明示いたします。

我々は戦争の状況においてのみ解決を捜しているのではありません。この戦争は我々の選択によるものではありませんでした。我が民族的存在を防衛せねばならなくしたのはトルコ国家によるものなのです。トルコ国家は我が人民への汚い戦争を行なうという非妥協的決意をもって、国家のテロを通じて軍事的解決に到達することができると確信したのです。

今後の方向性を進展させる生産的かつ効果的な重要決議を、あなたがたが可決することを信じ、私の心からの挨拶とさせて頂きます。

ARGK発表：クルディスタン戦況報告

1994年３月～４月

クルド人民解放軍（ＡＲＧＫ）は、今年３～４月の北西クルディスタン（トルコ南東部）における、トルコ国家とＡＲＧＫゲリラとの戦況報告を発表した。ＡＲＧＫ報道部は、次のように報告した。

トルコ当局は「春には数人のゲリラも山には残っていないだろう」と、公言している。しかし、今やすでに春となっている。３～４月の戦況報告が示すとおり、トルコ国家は、ゲリラを打ち破るのに失敗したのではなく、彼ら自身が打ち破られたのである。

【1994年３月】

１．ＡＲＧＫは21の道路を管理、支配下に置き、 252回の軍事攻撃を 252カ所で遂行した。

○トルコ軍の損害：将官21人、兵士 483人が死亡。２人の将官と 172人の兵士が負傷。

○村落防衛隊（トルコ国家が村に組織した自警団的組織）のリーダー３人と隊員 106人が死亡し、57人が負傷。

○合計で91人の対ゲリラ部隊員、国家諜報員、警察官、協力者が死亡し、78人が負傷。

○トルコ国家の戦争遂行に加担する39名をトルコで拘留し、取り調べの後、有罪と認められる者には処罰を下した。

○ヘリコプター３機、戦車５両、パンサー装甲車８両を破壊。35両の軍用車両を、地雷とロケット砲で破壊。多数の橋、道路、石油パイプラインを破壊。

○多量の弾薬、爆弾、軍用装備、 115頭の家畜、52万トルコ・リラがゲリラによって捕獲された。

２．村落防衛隊と彼らの監督の下に運営される２つの村落の全住民に対し、ＡＲＧＫが６ヶ月の恩赦期間を与えた。この結果、 559の村が武装解除し、武器を置いた。

３．この月、86人のゲリラが戦士として殉死し、13人が負傷し、２人が捕虜となった。

キャンプ地でのＡＲＧＫ女性兵士たち

対空機銃を操作するＡＲＧＫ女性兵士たち

４．トルコ政府の軍事行動、村の爆撃や強制立ち退き、逮捕、捜索、拷問に対して、各所で人民は抵抗した。選挙とネブロズにおいて、人民は、トルコ政府当局や政治に抵抗した。

５．この期間、クルドの民族集会では急ピッチで取り組みが進められている。地方大会では、いくつかの地域を解放するという目標が決定された。トルコ軍を撤退させた後には、これらの地帯にＡＲＧＫのゲリラ支配を拡大させ、さらにより専門的な人民の軍隊を養成することも決められた。

【1994年４月】

１．トルコ国家の軍隊に対して、 300回の攻撃を遂行した。この攻撃で、８人の将官を含む 630人のトルコ軍兵士が死亡し、 161人が負傷。70人の村落防衛隊が死亡し、50人が負傷。49人の警察官、特殊部隊、対ゲリラ要員、協力者などが死亡し、15人が負傷。45人の村落防衛隊員、協力者が、我が軍によって逮捕され、調査が始められている。

２．３丁の自動火器、51丁の拳銃、３丁のピストル、8428の弾薬、64の弾倉、32の手榴弾、地雷、ロケット弾、双眼鏡、ラジオ、そして軍用装備を、ＡＲＧＫはトルコ軍から捕獲した。

３．61両の車両が地雷で爆発し、12両の戦車、14両の装甲車がＡＲＧＫのロケット砲で被弾。さらに、戦闘機１機、コブラ・ヘリコプター６機を、撃墜もしくは被弾させた。

４．４月に遂行した攻撃で、93人のゲリラが死亡し、37人が負傷している。

５．各所で、人民は、トルコ国軍の攻撃、拷問、虐殺、村落の強制立ち退きに抵抗した。例えトルコ軍が侵略戦争を強めても、彼らはクルディスタンの幾つかの「危険地帯」からの撤退を強いられているのである。トルコ軍に遺棄された２つの要塞が破壊された。この地域は今や、ゲリラによって支配されているのである。民族の団結を発展させ、クルディスタンの至る所で引続き草の根の組織を作り上げるために、活動しよう。

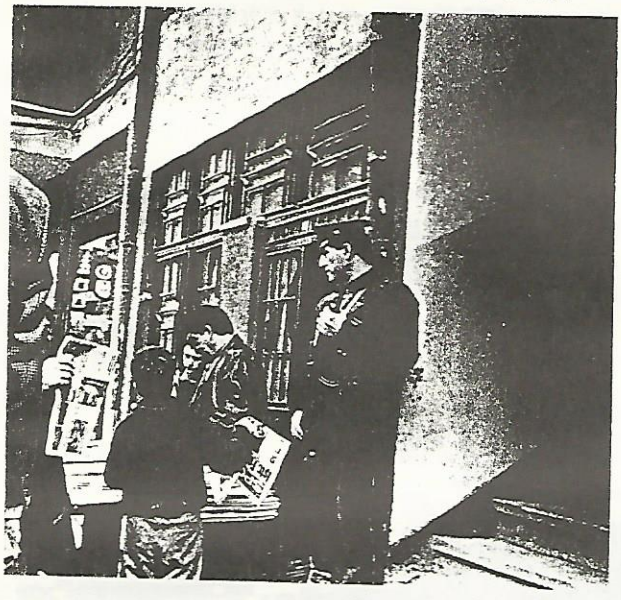
クルディスタン・レポート(2)

★度重なる言論弾圧

トルコの反体制日刊紙「オズグル・グンデム」は、今年の4月14日から15日間の発行停止処分を受けた。同時に、前経営者ヤシャール・カヤに1億2500万リラ、前編集責任者セイダヴート・カラカグに6200万リラの罰金が課せられた。発行停止処分の理由は、PKK総書記アブドゥーラ・オジャランとのインタビューを1993年5月2日と3日の二回にわたって掲載したことと、「連帯のプラットフォーム」と題したコラムを掲載したことであった。

「オズグル・グンデム」紙は、今までにもクルディスタンの問題を扱うことなどにより、頻繁に発行停止処分を受けている。停止処分に止まらず、例えば、記者や売り子（ほとんどが子ども）の殺害、暴行、逮捕などが行なわれている。今年などは、全員が一斉逮捕される事態も起きている。

閉鎖したオズグル・グンデム社屋前を警戒する警官



★弾圧を逃れて新党結成

5月11日、41人の民主党（DEP／親クルド）のメンバーは、トルコ内務省に人民民主党（HADEP）の結成を届け出た。

DEPは17人のクルド人国会議員を擁し、クルド人の人権を擁護するために活動している。このため、PKKとの関連を問われて、厳しい弾圧を受けている。現在、分離主義を支援した罪により、6人の国会議員が拘留され、党自体も告発されて係争中であり、閉鎖されてしまう可能性が非常に高い。

今回の新党結成は、例えDEPが禁止されても新党の下で活動が継続されることを目的としたものである。DEPも、人民労働者党（HEP）が禁止処分を受ける前に、その活動を引き継ぐために結成された経緯がある。

今回のHADEPは、クルド系議会政党としては、実に4つめにあたる。政党名にクルドとつかないのは、トルコ政府が、自国内でのクルド人の存在そのものを認めておらず、合法活動が不可能となるからである。トルコ政府は、これらクルド系政党を「PKKの議会での武器」だとして、激しい弾圧を繰り返している。

HADEPは、6月26日に最初の大会を開催した。参加した人々は、クルド解放のスローガンと「指導者アポ（PKK総書記オジャランの愛称）万才！」を叫んで気勢を上げた。

★DEP禁止処分となる

6月16日、禁止処分について係争中の民主党（DEP）に対する禁止処分が決定した。これにともない、同党の全議員が身分を剥奪されることとなる。現在5人の議員が投獄されており、6人はヨーロッパに避難、2人がトルコに残留して拘留の危機にさらされている。

★フランクフルトで5万人を越える大デモ

6月25日、ドイツのフランクフルトで5万人（10万人以上という説もある）を越えるクルド人の大デモが行なわれた。9キロにも及ぶこの堂々たる行進は、同市の歴史でも最大規模のものであった。

デモでは、トルコへのドイツの武器輸出の停止、平和的かつ民主的な政治的解決がトルコ領クルディタンでの衝突を終わらせること等が訴えられた。もちろん、PKKを始めとするクルド諸組織に対する「活動禁止措置」の解除が訴えられたことは言うまでもない。ドイツ政府の禁止措置にもかかわらず、このデモでもERNKの旗、PKKへの支持を表明するTシャツや旗等が溢れかえっていた。

ドイツのカンター内相は、デモに先立つ23日に、欧州各地からのデモへの参加を警戒し、国境管理を強化するよう指示した。これによって、デモに参加するためにドイツに入国しようとしたクルド人約 200人がドイツ国境警備隊によって阻止されるということも起こった。これに抗議して、3か所の国境管理所でハイウェイを封鎖する闘いが展開された。

★トルコ領事館占拠者に判決

昨年11月24日、PKKの企画した全欧行動の一環として行なわれたミュンヘンのトルコ領事館占拠で逮捕されていた13人のクルド人（21〜31才）に対する判決が、7月6日に出された。全員が有罪で2年6ヶ月から4年6ヶ月の刑を受けることとなる。この判決は検察側の求刑よりも軽いものであった。

この闘争では、21人の大使館員を数時間にわたって人質とし、「ドイツのコール首相との会見、クルディスタンでのトルコの虐殺戦争への非難をテレビで放映すること」が要求された。要求は受け入れられなかったが、人質を解放して占拠者たちは投降した。

（16ページにつづく）

ギリシャ/アナーキストの武装闘争

政府・警察・経済施設等を連続攻撃

【1994年1月】

3／ギジ（アテネ）のＰＡＳＯＫ（政権党）の地域事務所とゾクラフォウ（アテネ）地方警察署を放火。

7／アテネ郊外の税務署に放火。政治囚ペトロポウロスのハンストを支援するため、アテネ経済大学を占拠。占拠は14日まで続く。

10／アナーキストグループ『5月15日』は、アテネ郊外（N. スミルニ）で元警察官の車を放火。この闘いは、ペトロポウロスのハンストに連帯して行なわれた。パトラでの教師テボネラスの記念日期間中、アナーキストはスローガンを叫び、パンフレットを配布するなどの行動を行なった。パンフレットには、「国家の暴力を容認する者とは、正義とはかけ離れた者たちである。正義とは、日々の闘いによって勝ち取るものだ。十字架と釘をカラボカスと全ての支配者どもへ。正義はバリケードにあるのだ」と書かれていた。

11／警察官ラゴギアニスが、ピアエウス郊外のモシャトで職務質問を拒否した Th. ジアカスを殺害。この警官は、2日後に釈放されたが、法廷の外では怒った群衆によって襲撃された。

12／ペトロポウロスの請願・陳情は認められた。しかし、終身服役囚バラスは、ラリサ刑務所で自殺した。

14／『社会的連帯と多様な行動のためのアナーキストグループの協働』は、アナーキスト文献センターにおいて、1990～93年の学生叛乱についての集会を行なった。多くの人々が参加し、アナーキスト新聞、パンフ、ポスターが展示された。全世界で闘われている社会運動のビデオが上映され、その後、学生闘争についての討論が行なわれた。

26／アブロナ軍刑務所の囚人達が叛乱を起こす。劣悪な獄中処遇が理由である。ＭＡＴ（暴動鎮圧部隊）が投入され、暴動は数時間後に鎮圧された。数日後、軍事裁判の規定を変えると国は発表した。また、刑務所で多くの慰問ミュージカルショーをすることを約束した。これらは、今回のような暴動などの事態を回避するための目的でなされたものである。

27／ジアカス殺害に抗議して、約百人が、モシャトの地方警察署にタマゴ、ペンキ缶を投げた。

28／警察は、アテネのバシス広場の占拠学校に侵入し、学校占拠を解除した。

【1994年2月】

1／ハニア（クレタ）の軍士官の車、爆破される。

2／アテネ中心部でドイツ系企業の車を放火。『獰猛なるアナーキスト』は、ＲＡＦ（ドイツ赤軍派）の囚人に連帯した行動との声明を出す。

7／『我らの手に法を奪え』グループが、ＰＡＳＯＫの事務所3ヵ所を放火。カルテザス、キケリス、ジアコス殺害に抗議して行なったとの声明。カルテザスは、アテネ中心部でのアナーキストと警官隊の衝突の際、警官メリスタスによって殺害された15才のアナーキスト。キケリスは、1990年にプレベサで、ビデオテープを盗もう

⇦鉄パイプ、火炎ビン等で武装したアナーキストのデモ

⇩アテネ等では度々暴動戦闘が行なわれる

として警官スピラコスに殺された15才の生徒である。

10／アテネ中央部にあるギリシャ共産党（ＫＫＥ）事務所を放火。『獰猛なるアナーキスト』が闘争声明。アテネで、警察車両を放火。アテネ近郊のシジフェスでは警備保障会社の車に放火。アナーキストグループ『５月15日』が声明。

16／アテネで警察車両を放火。『５月15日』が声明。

18／労働省の車両に放火。グループ『包囲下の自由人たち』が声明。

21／パティシアで警察車両を放火。『Th・ジアコス』グループが声明を出す。

26／アテネ中央部の商業銀行に火炎ビン攻撃。２月末から、ＥＬＡのメンバーとして逮捕されているバラファスの裁判が始まる予定。

27／パティシアの警備保証事務所ビルを放火。多大なダメージを与えた。アテネ郊外のダフニで、アテネ大学の車両を放火。『マツアリスの陰謀』グループが攻撃声明。マツアリスは、アナーキストの靴工で、1898年パトラにおいて銀行家フラゴポウロスを殺害した人物。

【1994年３月】

３／ペリステリ地区（アテネ）で、ドイツ系企業の旅行用トレーラーとバンを『革命行動』が放火。

４／ＮＤ（ネア・デモクラティア）の事務所を火炎ビン攻撃。

７／『反国家レジスタンス』、コロナキのＮＤ所有の家屋に爆破装置を設置、爆発させる。ＮＤのメンバーは、家屋にワイヤーを張り巡らせていた。

10／警察官クトパキスが、警官の家への侵入を試みていたアルバニア人ジウームフラスを殺害する。

18／『カオス主義者の陰謀』、Ｎ・フィラデルフィアで商人所有のトラックを放火。

20／エイズに苦しむ人々を援助するための組織ＡＣＴＵＰが、使われていない工場でパーティを行なっている間、一部の参加者が４台のパトカーを石と木片を投げて攻撃した。ＭＡＴが投入され暴動は拡大。ＡＣＴ－ＵＰのメンバーらの訴えによれば、警官隊が工場に乱入して、ＰＡ機材を破壊し、エイズに苦しむ人々のために集められた募金を強奪した。工場の外で暴動が激しくなると、周辺住民は、バルコニーから植木鉢その他を警官隊に投げ落とした。12人が逮捕され、警官２人が負傷。

21／『カオス主義者旅団』がエハルヒアのＰＡＳＯＫ事務所を放火。これは、前日に逮捕された12人に連帯して行なわれた。アテネでは、新聞社のトラックを放火。アテネ近郊のダフニでは、ＥＯＴ（ギリシャ観光協会）のバスを放火。『包囲下の自由人』が声明を出す。

22／20日に逮捕された12人の裁判は４月に延期される。

30／リミトのＮＤ事務所が火炎ビンで攻撃される。損害は軽微。プラスチック会社のバンを放火。『アナーキスト反逆派』が声明を出す。『反権力闘争』がアテネ市庁舎の火災報知器を爆破。

31／『都市のワイルドギース』が警備会社と警察の車両２台を放火。

News Briefs

★ハイドロ・ケベック社の送電塔爆破される

３月14日、ケベック州（カナダ）セント・バシル・グランデにあるハイドロ・ケベック社の送電塔が爆破された。送電塔は倒壊しなかったが、30分にわたって送電がストップした。この送電局はモントリオールの南約25マイルのところにあり、送電線はケベック北東からアメリカ国境まで伸び、125平方マイル、約15万人へ電力を供給している。

ケベック州にはモホーク・インディアンのネーションがあり、同社の環境破壊や労働条件が問題となっていた。

★ギリシャでトルコ外交官を射殺

７月４日、ギリシャの左翼都市ゲリラ組織「11月17日」はトルコの上級外交官を射殺した。発表された声明によると、この外交官オメール・ハルクはクルディスタンとキプロスでの人権侵害に責任を負っているとされている。1975年の作戦以来、「11月17日」はギリシャ全土で反資本主義、反帝国主義の爆破闘争を頻繁に行ない、19件の暗殺を行なっている。

★コルシカで反フランス爆破闘争

７月３日の夜、コルシカ島（地中海）のフランスからの独立を求めて闘いを続けているＦＬＮＣ（コルシカ民族解放戦線）は、６軒のバカンス用別荘等を爆破した。またこの翌日、８軒のフランス人オーナーの施設も爆破している。

★反ベルルスコーニ武装闘争

「反ベルルスコーニ武装部隊」は、イタリア右翼の政治的リーダーであるベルルスコーニの所有するデパート８店舗に火炎攻撃を敢行した。襲撃された店舗は、ローマ、ミラノ、フローレンス、ブレッシア、トレント、モデーナの広範囲にわたる。

ＥＺＬＮ呼びかけの国民民主大会開催
メキシコ全土から8000人の代表が参加

サパティスタ民族解放軍が今年６月に発表した「ラカンドンのジャングルからの第２宣言」（本紙13号に掲載）の中で提起された国民民主大会が、８月６日から９日までチアパス州で開催され、メキシコ全土31州から非政府組織（ＮＧＯ）、農民、先住民族などの代表8000人が参加した。

最初に代表たちはサン・クリストバル・デ・ラス・カサスで５つの分科会に別れて討議を行い、その結果を持って、７日にラカンドンのジャングルの中にあるサパティスタの解放区に設営された全体会場に向かった。サパティスタ兵士たちは会場設備の設営のために一日14時間の作業を28日間続け、図書館、20のゲストハウス、100台収容の駐車場などを作り上げたのであった。会場は、メキシコ革命中の1914年に革命的主権集会が開催された歴史的地名にちなんで、アグアス・カリエンテスと名付けられた。会場の中心には大天幕が張られ、この下で代表たちは熱心な討議を続けた。

サパティスタの副司令官マルコスは、この大会の目的は平和的市民運動を作りだすことと、不正選挙の阻止にあると語っている。大会に先立ち大会組織委員会のスポークスマンは、「不正選挙が明らかになれば、サパティスタはおそらく停戦協定を破棄することとなるだろう」と明らかにしている。またマルコス副司令官は、すでに４つの武装組織と連絡がある事実も語っている。苦戦を伝えられる制度的革命党（ＰＲＩ／政権党）が、新たな革命戦争の可能性を前にしてまで、不正選挙を続けるのかどうかが注目される。

大会は、ＰＲＩ権力の解体と、新憲法制定会議を行う過渡期政府の樹立を要求として終了した。決議などの詳細については追って発表して行きたい。

サパティスタは、大会で作り出される市民運動の命令下に彼ら自身を置くことを明らかにしている。これが実現して行けば、ＥＺＬＮはチアパスの先住民族の解放のための軍から、文字どおり新メキシコ革命のための軍となるわけである。メキシコのいくつかの地域でもゲリラの活動が報告され出している。革命の大衆的基盤と軍事的基盤が確実に作り出されていると言えるだろう。

（編集部）

（13ページからつづく）

★ゲリラ部隊、パイプラインを爆破

７月３日、ＡＲＧＫ（クルド人民解放軍）はイラク国境から約40キロのミドゥヤット近くで原油パイプラインを爆破した。パイプラインは長時間にわたって、燃え続けた。このパイプラインは、イラクのキルクーク油田からトルコ南部の沿岸地帯までの全長 986キロに及ぶものである。湾岸戦争の際に閉鎖されていたが、現在は再開していたものである。ＡＲＧＫは、今年に入ってから、度々パイプラインへの攻撃を行なっている。

★刑務所で大規模な抵抗運動

４月にディヤルバキル刑務所のＰＫＫ政治囚によって開始された出廷拒否闘争は拡大し、多くの弁護士の支援のもと続けられている。この行動には、ＰＫＫだけでなく、デブ・ソル（革命的左翼）やＴＫＰ－ＭＬ（トルコ共産党ＭＬ派）等の多くの革命的左翼の政治囚たちも参加している。

闘いへの報復として、アンテップ特別刑務所の 200人の政治囚は12ヶ所の別の刑務所へ分散移送された。

ブカ刑務所で転向を強要する拷問を受けたＰＫＫの政治囚３人は、非転向を貫いたためにナジリ刑務所に移送された。彼らはブカ刑務所に戻ることを要求してハンストを開始した。

デブ・ソルとＴＩＫＫＯの政治囚たちはカイセリ刑務所で、一ヶ月以上ハンストを続けている。支援者と家族らは連帯のハンストを開始し、カナッカレ刑務所のデブ・ソル政治囚たちも連帯のハンストを６月９日から開始した。

ウルファでは、ＰＫＫの女性政治囚がハンストを続け、当局は家族との面会を妨害している。サカルヤ刑務所では、ＰＫＫの女性政治囚の支援をうけた６人の女性たちが、劣悪な獄中処遇に抵抗して50日以上ハンストを続けている。健康状態は悪化している上に、抵抗を中止しなければ独居房に入れるという脅迫を受けている。

エルビスタン刑務所では、 200人のＰＫＫ政治囚たちが「死の断食」を行なっている。ヤズガトゥとエルズルムでもハンストが行なわれている。

世界革命運動情報

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

★発行　A．R．P
★連絡先　〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP
★ＦＡＸ　０７５－７８１－１２５３
★定期購読料　10号分　３５００円
★郵便振替口座
（新）００９２０－０－２５２９２３　ARP
（旧）大阪２－２５２９２３　ARP